日本福音ルーテル教会　教会史資料編纂委員会ニュース

歴史は語る

2014年9月15日発行　第9号　　編集責任者　青山　勇

特集「海外ミッション・ボード」

南部一致シノッドのこと

徳善義和

St.John Lutheran Church
Charleston , SC

ヨーロッパから移民したルター派の信徒がアメリカで初めて教会組織をし、教会規則を定めたのはニューヨークにおいてで、それはドイツや北欧などからの移民ではなく、オランダからの移民だったと聞いたら少し意外に思うだろうか。オランダでは改革派教会が国教会だったから、自由教会としていろいろな制限を受けていたルーテル教会の信徒たちが宗教的な自由を求めてアメリカに移民し、自由教会型に定めた教会規則を採用したことが以後のアメリカルーテル教会の歴史にとって少なからぬ意味をもつことになったと言えるのではなかろうか。

ローノーク大学での南部一致ｼﾉｯﾄﾞ総会 (1886)
United Synod South at Organization

このニューヨークから南へ、ウィリアム・ペンの勧めもあってペンシルヴァニアを目指すドイツ移民も少なくなかった。1717年ライン沿岸地方からこの地を目指した移民の一団がいたが、彼らが着いた所はヴァージニア沿岸、いわば一文無しで、船賃も着払いという条件だったらしい。見かねた州知事が州内の荒れ地を開墾することを条件に船賃を立て替えて、彼らの移民生活は借金付きで始まった、と読んだことがある。開墾に精を尽くして、州知事に借金返済、ルーテルの信徒だけの聖書や祈りの集会、折々に北の地方から巡回牧師を招き、やがて自らの諸教会の牧師を招聘し、大学を建て、神学校を設立して牧師養成まで始めるという百年余が続いたはずである。こうして組織したシノッドが、その後南北戦争の緊張の時代に西ヴァージニア、ヒューストン、サウスカロライナ、ノースカロライナと共に南部一致シノッド(United Synod of South)となったのである。その後1918年には各地の主としてドイツ系のシノッドが合同、成立したのが北米一致ルーテル教会(United Lutheran Church in America)である。この時点でも西ヴァージニアとヒューストンと一緒にヴァージニア・シノッドを形成していた。この時このシノッドは牧師74人、教会145、会員1万7000人(現住陪餐8500人)だったというから、規模の点では今の日本福音ルーテル教会とあまり変わりがないということになる。

この南部一致シノッドに加わった各シノッドはいずれも南部の広い地域に、恐らく上述のヴァージニア・シノッドと同程度の規模のシノッドだったろうか。この南部一致シノッドは1887年に外国伝道を始める決定をし、伝道地を日本と定めた。宣教師の決定まで時間が掛かったが、最初に西ヴァージニアのJ・A・シェラーが、次にヴァージニアのR・B・ピーリーが宣教師として選ばれ、按手を受けて1892年に順次日本に派遣され、築地に滞在して日本語の学習を始めた。

ミッションボード(伝道局)幹事も決まったが、手紙の往復にも数ヶ月が掛かった時代、若い宣教師たちは限られた条件の中で、自転車で走り回って、市内近郊に聖書講義所などを設け、伝道活動に励んだ。当初は二人とも、外人居留地として定められたところに住むとか、地方なら公立学校教師などの地位を得た上で、指定された地域での居住制限を受けた。他教派の先任の宣教師たちの意見も聞いて、伝道地を佐賀と定めたが、最初に赴いたシェラーは県立佐賀中学校の英語教師として赴任し、佐賀城跡の辺りを指定されてそこに住まねばならなかった。こうした外国人の扱いが急速に変化、緩和された時代だったから、半年後にピーリーが佐賀に行ったときには、二人の日本語教師、やがて同労者となる山内量平の

設けた英語学校の教師という資格で、佐賀市内での自由な居住が認められて、やがて現在の佐賀教会の土地と、これに隣接したかつての宣教師館の土地の確保にも至ったのだった。しかしシェラーは病を得て、ピーリーは家庭の事情で間もなく日本を去ったが、続いて日本にやって来た第二陣のC・L・ブラウン、C・K・リッパード以下が、加わってきた邦人教職と共に久留米、熊本、博多へと伝道を展開して、九州での日本福音ルーテル教会の基礎を固めたのだった。

１９７７年夏私はインドのチェンナイ（旧マドラス）の神学校で４週間のルター講義に招かれた。その折インド各地の神学校を訪ねもしたが、ある神学校で私を迎えてくれたのはピーリー教授。尋ねるとやはりあのピーリー宣教師は祖父／大叔父？と答えてくれた。世界宣教の志はこうして代々伝えられていることを目の当たりにしたのである。

「日本へ、さあ、日本へ」

フィンランド・ルーテル福音協会の宣教

北尾一郎

一九世紀が終わろうとしていた。まもなく20世紀の鐘が鳴ろう。「アンノ・ドミニ」（主の年）というコンセプトを未だ知らない、日本という「遠くの島」・「日出ずる国」に「罪の赦しの良き知らせ」を「とどかす」べく、二組の宣教師を載せた船が、長崎港に到着した。１９００年12月のことである。

25歳のウェルロース牧師一家と17歳のクルヴィネンという女性宣教師一白夜の国から、緑に溢れる「鶴の港」に入港した彼らは、どんな第一印象を持ったであろう。

ウェルロース一家とクルヴィネン嬢

Ensimmäiset Japanin-lähetit vuoden 1900 lopulla: pastori Alfred Richard Wellross ja hänen puolisonsa Emma Augusta Sternberg sekä heidän lapsensa Tyyne Augusta, Taimi ja Kyllikki sekä oikealla 17-vuotias Ester Salome Karvinen.

彼らを派遣したのは、「フィンランド福音ルーテル教会」という国民教会ではない。その教会の中に起こった「信徒運動」としての「フィンランド・ルーテル福音協会」（ＳＬＥＹ）である。このことは、ＳＬＥＹの日本宣教の歴史とその性格を理解する上で、とても重要である。この運動体に参加する会衆は、「宗教税」を国家に納めるほかに、宣教のための献金を集める。そのために女性信徒の手にはいつも編み物の針がある、というように、グラスルーツの自覚的なミッション意識と実践が、海外伝道と国内伝道におけるＳＬＥＹの働きを支えている。また、ＳＬＥＹの指導部の努力が積み重ねられている。さらに、八つの教区から成る国民教会は、六つの海外宣教団体を公認し、「教会」と「協会」との調整をする部門を設けている。

さて、ウェルロース牧師は家族の病気や幼い子供の召天という事態の中で、長崎にその子の墓を遺して帰国した。一方、クルヴィネンは佐賀において開始されていた「南部一致ルーテル・シノッド」の米国ミッションの働きに協力する形で日本宣教をスタートさせた。１９０４年に起こった日露戦争で、当時帝政ロシアの支配下にあったフィンランドもこの戦争に関わることになったことを契機に、クルヴィネンは、独自の働きを模索し、東京を経由して、馬車で信州に入り、諏訪湖岸の下諏訪に拠点を置くことになる。現在の東教区で最初の教会が、こうして誕生した。１９０５年のことであった。

１９０８年には飯田の町で宣教が開始される。その後3年間に、上諏訪、岡谷、赤穂（駒ヶ根）へと働きが進められた。この間に、後続の信徒宣教師、牧師宣教師が派遣され、１９０７年には、東京の千駄ヶ谷に伝道所が開設される。それが、１９１６年に巣鴨に移り、１９３１年に現在地の池袋に転じた。その場所にはすでに１９２４年にＳＬＥＹの日本人教職を養成するための神学塾が建てられていた。さらに、１９３４年には、大岡山で「東京第二福音ルーテル教会」がスタートし、後に「大岡山教会」と改称される。

もう一つの展開は、１９１６年に始まった札幌伝道である。１９３６年には旭川で伝道が開始される。

このようにして、東京・信州・北海道というSLEY の宣教領域が定まったことになる。そして、太平洋戦争へ向かう政治状況の中で、「日本基督教団」が形成される。その直前、１９４０年に「日本福音ルーテル教会」とのルーテル合同が進められ、ＳＬＥＹの働きによって成立した「福音ルーテル教会」は、「東信北部会」として緩やかな合同をする（第一次合同）。戦争中は苦難の時代であった。その深刻な混乱は、戦後の「福音ルーテル教会」の再建、そして、１９５９年には松本、１９６１年には長野で宣教が開始され、多くの宣教師が今日まで派遣され続けている。ＳＬＥＹの働きは、客観的な恩寵義認の信仰と素朴な敬虔といったエートスを特徴とし、日本のルーテル教会と遣わされた地域に対して、特に礼拝式文、幼児教育の分野において大きな貢献をしてきた。スオミと日本との人的交流は豊かであり、日本のスオミファンが多いことも、ＳＬＥＹの宣教師たちの誠実な働きに負うところが大きい。そして、１９６３年のルーテル合同によって、東信北の教会は、東教区と北海道特別教区の中で生きている。

宣教団体「オーガスタナ・シノッド」

―ルター主義公同性の立場を堅持して―

石田順朗

キリスト教宣教史は、世界史を舞台に神の救済史を現世的に展開して行く。数々の人為的、政治的な要因が絡み合っているのは事実で、宣教（伝道）論では重要でさえある。早くには皇帝コンスタンチヌス一世がキリスト教を公認した『ミラノ勅令』（３１３年）があり、反ナチス闘争に関わったドイツ福音主義教会の『バルメン宣言』（１９３４年）は、最近、殊のほか記憶に甦ってくる。

戦後復興して間もない日本福音ルーテル教会にとって、１９４９年、中華人民共和国の成立は、その中国より引き揚げを強いられたアメリカ、ノルウェーの伝道諸団体の来日参画による宣教拡張を促し、奇しくも伝道躍動期をもたらした。当時、神学生の身で続々と来日した宣教師方との奇遇については、本誌第5号（２０１２年６月）に記載したことである。

「オーガスタナ・シノッド」について、多少重複を厭わず、晩年までシカゴルーテル神学大学世界宣教研究所で同僚の誼を続けた故Ｄ・Ｌ・ヴィクナー師を始め、先陣のオーガスタナ宣教師たちのことをまず述べたい。１９５０年４月、オーガスタナ外国（世界）伝道局スワンソン総幹事の視察訪日を経て、その秋、シスター・アーリング、コルバーグ女性宣教師に次いで来日したヴィクナー師とは、ご夫妻が到着された翌朝、Ｋ・デール、Ｇ・オルソン宣教師夫妻の方々を連れて、時の総会議長故平井清先生牧する都南教会の主日礼拝に出席された折、たまたま通訳をしたことで早々に懇意の仲となった。当日午後には、田園調布での家探し（オーガスタナハウス）と教会堂敷地探索にも同道した。しかも翌年には、シスター・アーリングと共に、第一回「田園調布教会軽井沢夏期聖書学校」の聖書研究指導兼宿泊マネージャーを務めたしだい。コルバーグ宣教師を伴って広島に派遣されたオルソン師夫妻とは、翌１９５２年夏、荒廃した広島市で街頭伝道を敢行、山陽部会（現関西を除く西教区）の出立にも関わらせて貰った。その頃、広島に次ぐ宣教地、宇部市に赴任したデール先生ご夫妻を訪れたのも想い出に残る。

1951 年田園調布教会献堂式

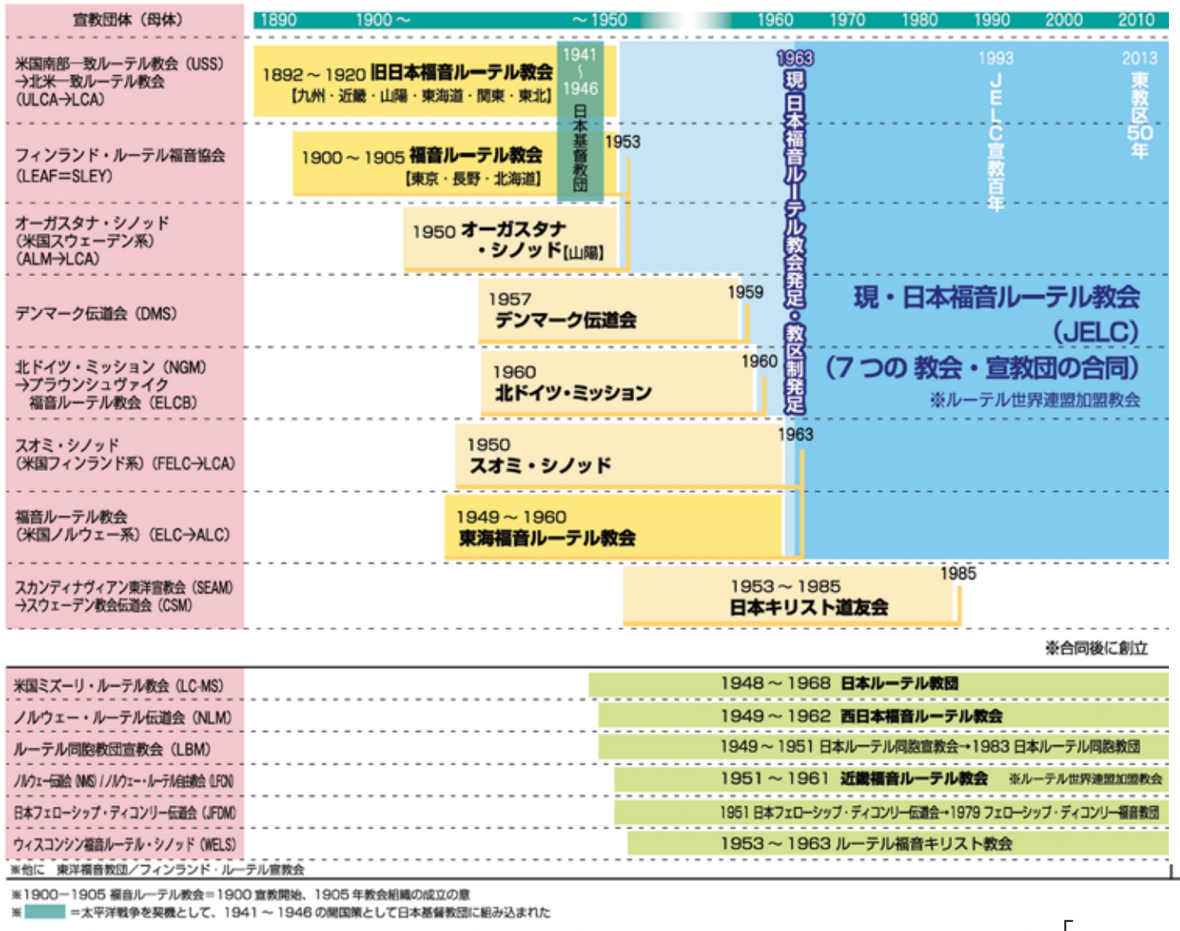
１９４９年から盛り上がったルーテル諸派の伝道活動は、宣教論で重視する「伝道地域分担策（comity）」に則った好例の展開だった。加えてオーガスタナの場合、派遣母体アメリカのオーガスタナ派教会の「姉妹教会」を組織することを避けて、当初から、あくまでも日本福音ルーテル教会の一翼となり、田園調布の他は山陽部会の構成教会群になる協約を締結した。日本伝道史に特記すべきミッション・パタンが刻まれたのである（１９５１年）。

その背景を辿れば、オーガスタナ派教会が、世界に現存する約二百のルーテル教会群の間で、通常の「福音ルーテル」＋国名・地域名を付す慣例を破り、（スエーデン、ノルウエー［国］教会や香港の信義会を別にして）『アウグスブルグ信仰告白』のラテン読み「オーガスタナ」を教会名の頭にする僅か数教会の代表格の教会であることだった。１９６０年６月、ウィスコンシン州でスエーデンからの移民を主にして誕生、当初　の The Scandinavian Evangelical Lutheran Augustana Synod in North America から数回名称変更を行ない、１９４８年、オーガスタナ派ルーテル教会に定着した。その後、北米におけるルーテル諸派の合同（LCA,1962年・ELCA,1988 年）では主導的な役割を演じ、ELCA 最初の主管監督にはオーガスタナ出身のＨ・チルストロム牧師が選ばれた。

こうした特異な教会形成を支えたのに、スウェーデン国教会のＮ・ゼーデルブロムやＡ・ニグレンの神学者らによって提唱された「ルター主義公同性の立場」があった。ルター的信条の公同的一致性を強調し、本来ルター主義とは一つのグループや教派ではなく、使徒的宣教の連続性を保持するための「キリスト教会内での一つの運動」であり、信仰義認と聖書の規範性の堅持をエキュメニカル運動への「かけ橋的役割」とした。１８７８年、初の宣教師、Ａ・Ｂ・カールソン師をインドに派遣したオーガスタナ世界伝道局は、１９０８年には中国、１９２４年にはタンザニア、そして戦後日本へと、総勢二百名もの宣教師を遣わした。何処にあっても「ルター主義公同性の立場」が堅持されていた、と宣教史の諸文献は記録する。

1951 年 JELC 執行部とオーガスタナ・シノッド宣教師

日本のルーテル教会　系譜　日本福音ルーテル教会東教区 50 年記念誌 to-morrow より引用



「一つの教会」としての日本福音ルーテル教会の形成

日本福音ルーテル教会の系譜は1892年に日本宣教を開始した南部一致シノッドの宣教から始まっている。アメリカのシノッドの一つである南部一致シノッドがルター派の自主、自立の教会の設立を目指して、日本福音ルーテル佐賀教会を1898年に誕生させ、久留米、熊本へと伝道領域を広げ、さらに東京、関西へと伝道拠点を築いていった。

改めて、ここに掲げている日本福音ルーテル教会の系譜と海外ミッションボードとの関係を見て分かるように、現在の個々の教会はルター派の宣教団体である海外ミッションボードによる宣教の業によって誕生してきた教会である。そして、それぞれの海外ミッションボードによって生まれた教会が戦後、一つの信仰告白と同じ職制の下で1963年に合同し、今日の日本福音ルーテル教会が形成されてきている。個々の教会が無関係に発生、発展して地域的な教会群を形成し、連合・連盟関係を結んで今日の日本福音ルーテル教会が存立しているのではない。

つまり自由連合的な教会の一致を目指して、日本福音ルーテル教会が形成、発展してきたのではなく、同じ信仰に立つルター派の海外ミッションボードの宣教団体によって、日本福音ルーテル教会の各個教会が形成されてきている。この歴史的形成を考えても、日本福音ルーテル教会がキリストにあって「一つの教会」であるということは紛れもない事実であると言える。

ELC海外伝道局ボードメンバー（ミネアポリス 1950年頃

東教区

東教区・教会名	ミッションボード	宣教開基年度
千葉	ULCA	1952年
銚子集会所	ULCA	1962年
市川	ULCA	1948年
稔台	ULCA	1953年
津田沼	ULCA	1951年
聖パウロ	ULCA	1953年
小岩	ULCA	1935年
市ケ谷	ULCA	1954年
東京	USS	1909年
武蔵野	ULCA	1926年
保谷	ULCA	1952年
三鷹	教区伝道	1961年
東京池袋	LEAF	1907年
小石川	ELC	1950年
本郷	ELC	1956年
大森	FELC	1956年
雪ケ谷	ULCA	1926年
田園調布	ALM	1951年
蒲田	ULCA	1949年
大岡山	LEAF	1934年
都南	ULCA	1931年
日吉	ULCA	1957年
八王子	全国レベル開拓	1969年
鶴が丘	教区伝道	1968年
松本	LEAF	1959年
長野	LEAF	1961年
飯田	LEAF	1908年
甲府	FELC	1953年
諏訪	LEAF	1905年
岡谷集会所	LEAF	1915年
板橋	ELC	1954年
横浜	ULCA	1948年
横須賀	ELC	1957年
小田原	ELC	1955年
湯河原	ELC	1955年
羽村	ULCA	1949年
鶴ケ谷	教区伝道	1971年
仙台	ULCA	1957年
スオミ	LEAF	1987年

東海教区

東海教区・教会名	ミッションボード	宣教開基年度
静岡 菅羽礼拝所	ELC	1951年
ひかり礼拝所	ELC	1961年
栄光　藤枝礼拝所	ELC	1963年
焼津礼拝所	ELC	1952年
島田礼拝所	ELC	1951年
幸母	ULCA	1939年
なごや希望キ池礼拝所	USS	1915年
希望礼拝所	ELC	1964年
名東礼拝所	教区伝道	1984年
名古屋めぐみ	ELC	1951年
知多　半田礼拝所	ELC	1952年
常滑礼拝所	ELC	1959年
高蔵寺	全国レベル開拓	1966年
小鹿	ELC	1953年
清水	ELC	1957年
浜松	ELC	1951年
岡崎	ELC	1952年
刈谷	ELC	1954年
復活	ULCA	1929年
沼津	ELC	1952年
富士	ELC	1953年
静川・鶴川　静川礼拝所	ELC	1955年
菊川礼拝所	ELC	1958年
浜名	ELC	1962年
みのり　豊橋礼拝所	ELC	1953年
田原礼拝所	ELC	1955年
岐阜	ULCA	1955年
大垣	ELC	1965年
新霊山	SEAM	1964年

北海道特別教区

北海道教区・教会名	ミッションボード	宣教開基年度
札幌	LEAF	1916年
札幌・北礼拝堂	ULCA	1956年
札幌・新礼拝礼拝堂	全国レベル開拓	1981年
恵み野	全国レベル開拓	1985年
函館	LEAF	1957年
帯広・池田礼拝堂	LEAF	1956年
帯広・帯広礼拝堂	教区伝道	1971年
帯広・釧路礼拝堂	全国レベル開拓	1966年

西教区

西教区・教会名	ミッションボード	宣教開基年度
京都	ULCA	1921年
大阪	USS	1917年
天王寺	ULCA	1951年
西宮	ULCA	1957年
神戸	ULCA	1918年
西条	ALM	1952年
広島	ULCA・ALM	1928年
呉集会所	ALM	1955年
宇品集会所	ALM	1953年
下関	USS	1915年
厚狭	ALM	1962年
宇部	ALM	1953年
賀茂川	ULCA	1952年
修学院	SEAM	1959年
豊中	ULCA	1957年
神戸東	ULCA	1930年
三原	ALM	1953年
福山	ALM	1958年
岡山	ALM	1949年
松江	教区伝道	1966年
高松	全国レベル開拓	1973年
シオン徳山礼拝所	ALM	1962年
柳井礼拝所	ALM	1954年
防府礼拝所	ALM	1954年
益田礼拝所	ALM	1956年
松山	全国レベル開拓	1966年
釜ケ崎	ELCB	1976年

九州教区

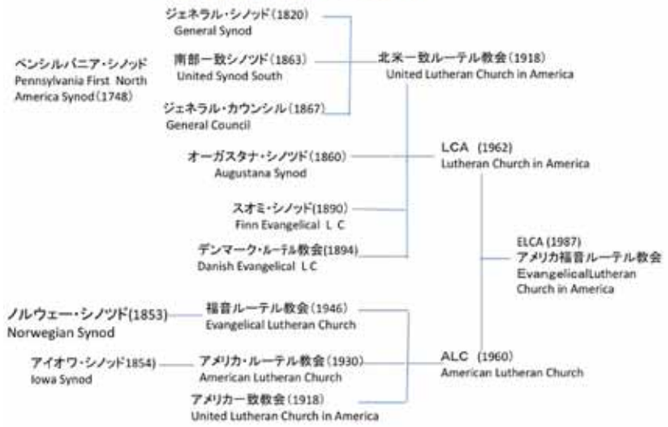
九州教区・教会名	ミッションボード	宣教開基年度
博多	USS	1905年
福岡西	教区伝道	1972年
箱崎	ULCA	1936年
聖ペテロ	ULCA	1950年
久留米	USS	1898年
大牟田	USS	1902年
田主丸	ULCA	1952年
熊本	USS	1898年
玉名	ULCA	1933年
大江	ULCA	1921年
宇土	ULCA	1953年
神水	ULCA	1930年
松橋	ULCA	1953年
室園	ULCA	1948年
健軍	ULCA	1953年
甲佐	ULCA	1956年
大分	ULCA	1949年
別府	ULCA	1953年
日田	USS	1909年
八幡	ULCA	1918年
門司	USS	1914年
直方	USS	1909年
小倉	ULCA	1949年
二日市	ULCA	1953年
甘木	USS	1914年
唐津	ULCA	1922年
小城	USS	1895年
長崎	ULCA	1949年
佐賀	USS	1893年
水俣	ULCA	1921年
八代	ULCA	1952年
鹿児島	ULCA	1921年
阿久根	ULCA	1961年
合志	ULCA	1952年
荒尾	ULCA	1951年
宮崎	ULCA	1958年

海外ミッションボード（宣教団体）		宣教開始年度
米国南部一致シノッド	USS	1982
北米一致ルーテル教会	ULCA	1918
フィンランド福音ルーテル協会	LEAF	1900
米国福音ルーテル教会	ELC	1949
米国オーガスタナシノッド	ALM	1950
米国スオミ教会	FELC	1953
デンマーク伝道会	DMS	1957
北ドイツミッション	NGM	1960
ブランシュヴァイク領邦教会	ELCB	1976
スカンディナヴィアン東洋宣教会	SEAM	1953
スウェーデン教会伝道会	CSM	1964

日本福音ルーテル教会
教区別・各個教会の
関連ミッションボードと
宣教開基年度

[本教会事務局作成]

アメリカ・ルーテル教会系譜



ELC（福音ルーテル教会）の日本伝道参入の経緯

青田　勇

(1)1948年時点でのアメリカ・ルーテル教会

第二次大戦後の、1948年の時点でアメリカには17のルーテル教会の団体が存在し、総会員数（カナダも含め）は、600万人を数えていた。最大のルーテル教会はドイツ系を中心としたULCA（北米一致ルーテル教会）であり、会員数は191万9822人。次に、LCMS（ミズリー・シノッド）は生粋のドイツ系の教会で、第2番目の規模を誇り、会員は161万7692人。ELC（福音ルーテル教会）はノルウェー系の教会で、第3番目の規模であるが、会員数は77万2863人であった。さらに、1950年より、山陽地域に伝道を展開することになるスウェーデン系のALM（オーガスタナ・シノッド）は、43万2329人の会員を有していた。

(2)ELCの日本伝道参入

ELCは1949年2月、日本伝道開始を決定し、11月、宣教師O・ハンセンを日本に派遣した。1950年、文京区丸山町（現、千石3丁目）の民家（350坪）を購入し、「丸山町ハウス」と称し、宣教師の第一陣はそこに居住し、文京区林町（現、千石2丁目）の日本家屋（360坪）も購入し、東京福音ルーテル教会（現・小石川教会）として1950年4月2日に最初の礼拝を守った。

日本に来日したELCの第一陣の宣教師の中には短期間であっても、中国伝道に身を投じていた人たちが含まれていた。ノルウェー系の中国伝道は1890年に始まり、「ノルウェー福音ルーテル中国伝道協会」が最初の宣教師を派遣した。2年後の1892年には、ELCに統合される前の、シノッドの一つであったHauge Synodが湖北省と洛陽に伝道地の拠点と定め、中国伝道に加わった。1920年時点で中国伝道に派遣されたELCの宣教師の総数は125名を数えていた。

一説によると戦前のある時期において、欧米のプロテスタント宣教団体から中国全土の伝道に送り込まれた宣教師の総数は男子が約600人、独身女性が約320人に上ったと言われている。アメリカ・ルーテル教会は他のプロテスタント宣教団体に比べて後発的宣教団体そのものであったが、1898年にULCA、1905年にALMも中国伝道に参入している。

だが、1949年10月、共産党政権の成立により、すべてのプロテスタント宣教団体にとって中国での伝道活動は厳しい状況となり、そのために、ELCも1948年秋には中国伝道から撤退し、新たなる伝道地をアジアに求めざるを得なくなった。ホード総幹事R・A・シルダルは1949年4月から約1ヶ月近く、来日し、各地を視察した。ミネアポリス教会本部は同年6月23日、その報告に基づき、ELCの日本伝道の参入を決定し、その伝道地域は東海地方を中心に展開することとした。

(3)主要伝道拠点（静岡、島田、浜松、名古屋）の確定

最初に来日した宣教師O・ハンセンとP・ハイランド、それに婦人宣教師B・ボイヤムとL・ハンソンは東京・小石川での日本語研修の傍ら、1950年秋から東海道線の主要都市を調査し、静岡、島田、浜松、名古屋を宣教の主要拠点として選定していった。

1950年12月の第1回宣教師会では土地及び建物規模の基準を次のように決めている。

「1.家族用宣教師館の建坪面積は35坪から40坪とする。婦人宣教師住宅は25坪から30坪とする。坪単価は5万円以内とする。会堂建築費は別途とする。

2.上記の建物は400坪から550坪の土地面積に建築する。」(First Conference of ELC,Japan Mission,Dec.27-29,1950)

1951年には静岡教会の教会用地として、399・21坪が、名古屋恵教会は291・83坪が購入されていった。

さらに、1951年11月、第2回宣教師会では「学生センター」（東京・小石川）の伝道の開始と共に、第2次宣教拠点の候補として半田、岡崎、豊橋、焼津、富士の5箇所を加えていった。

このELCが草創期に行なった東京及び東海地方で展開した拠点伝道は単独の伝道ではない。当時の日本福音ルーテル教会、北米一致ルーテル教会、さらにオーガスタナ・シノッドとの事前の日本宣教計画を相互に確認し、かつその計画実施の了解の下にルター派としての宣教が展開されていった。その意味ではルター派の協同伝道の一環であったと言える。

(4)「宗教法人福音ルーテル教会日本伝道部」の法人格取得

1952年6月、ELCの宣教師会は東京都庁に提出する「宗教法人福音ルーテル教会日本伝道部」としての規則の草案について最初の協議を行い、同年10月、静岡で開催された常議員会で東京都庁からの要望を入れて、最終的修正を加え、それを東京都庁に宗教法人規則として提出し、1953年1月28日付で正式に認証され、宗教法人格を取得した。ただし、この法人格は1963年の日本福音ルーテル教会との合同により終息することとなる。